

## 第2回 那須烏山市総合政策審議会 会議録

日 時：平成27年5月29日（金）午後3:00～

場 所：烏山庁舎2階第4会議室

### ■ 会議次第 ■

- 1 開 会
- 2 会長あいさつ

#### 協議事項

【報告】 (1) 人口ビジョン、まち・ひと・しごと創生総合戦略策定方針について

【協議】 (1) 「人口ビジョン」と「総合戦略」に関する論点整理について

〈資料〉

- ・「人口ビジョン」及び「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の策定に向けた人口動向分析・将来人口推計について（別紙1）
- ・分析結果及び整理（別紙）

- 3 そ の 他
- 4 閉 会

### ■ 出席者 ■

（審議会委員） 中村会長、遠藤委員、松本委員、八木沢委員、堀江委員、棚橋委員、島崎委員、両方委員、滝口委員、塩田委員、小幡委員、萩原委員、小堤委員、矢口委員、町田委員、江口委員

（総合政策課）

-秘書政策室- 福田室長、水上課長補佐兼総括、田代課長補佐、関課長補佐

### ■ 意見概要 ■

【協議】(1)「人口ビジョン」と「総合戦略」に関する論点整理について

会長 : 先ずは人口ビジョンに絞って話を進めたい。「別紙2」に人口ビジョンについての論点を整理していただいている。この内容を全体的に見渡しながら、皆さんのお考えのあるところをじっくりとかがいたい。意見が全員一致となる必要はない。「論点1 現状分析」について、ご意見等があればお願いしたい。

委員 : 日本経済の大きな変化の影響をまともに受け、那須烏山市の人口は平成7年度以降急激に減少している。元に戻すには相当な時間がかかる印象を受ける。資料8ページの「図表9 年齢階級別の転出状況」を見ると、少し明るい展望のようなものが感じられる。県内への転出が県外への転出を上回っているということは、施策の展開の仕方によれば、市内に人口を留める可能性もあるのではないかという印象。例えば、通勤・通学の費用や居住の費用に関する施策など。他市町との関係から、若者世代にとって低廉なコストで居住の場が確保されれば状況はかなり違うと思う。

- 会長 : 芳賀町を視察する機会があったが、若い人達に凄く人気があり、流入がどんどん進んでいる状況である。その結果として近くにスーパーなどが立地するようになった。とにかく何かを仕掛けるということ。「論点2」の人口減少に伴う影響について、那須烏山市にとってあまり良くないことばかりだろうか。
- 委員 : 仮に人口が増加していたとすれば、現在は全く異なった状況になっていたはず。財政的な負担も莫大であったろう。人口減少が続いたために、割と平和な状況にあるともいえる。
- 委員 : 那須烏山市に家を建てたが、手厚い補助のために色々なメリットがある。市内事業者を利用した場合はじめ、様々な補助制度や特典があるが、意外にそれが市民の皆さんに知られていない。市のPRが不足しているのではないかと思う。
- 会長 : 人口が増えている市町などでは考えられないようなメリットもある。行政としては住んでもらいたい、利用する側からは総体的に有り難い仕組みである。
- 委員 : 資料10ページの雇用や就労等に関する分析について。平成22年国勢調査のデータを用いているが、5年前と現在では労働に関する状況が相当変わっている。5年前の資料が適切かどうか疑問。那須烏山市の現在の雇用状況について、有効求人倍率は4月時点で0.71、1年前から変化がない。全国的には増える傾向にある。地元で就職してもらえない状況が続いている。地元企業にはどんな産業のどんな職種があるかしっかりと実態調査を行い、こんな働き場所があると市民にきちんと知らせることが、転出を防ぐことにも転入を促すことにもつながると思う。準備が難しければ、我々の手許にある実態に関する統計データをお示しすることも差し支えない。
- 会長 : 議論の材料として統計データが必要とのことだが、近年の変化の動向からはどのようなことが言えるだろうか。
- 委員 : 求職者と求人者のデータを見ると、確かに働く場所は減っているが、働きたいと希望している人も減っている。まだまだ働く場所はあるのに、働いてもらえないというものは何かの問題がある。その辺りの分析をしっかりと行ってほしい。
- 会長 : 採用したい人はいるが求職する人は少ないミスマッチの状況にあるということ。この辺りを変えていけば何か見えてくるかもしれない。
- 委員 : 資料4ページの「図表1 総人口の推移」に関して。平成17年の31,000人から平成27年の27,000人まで、合併してから4,000人位減っている。素朴な質問だがどうして人口が減るのか。どういう年代の人がどこに何人くらい転居していったかについては、資料を見ればおおよそ分かるが、転居の理由について、プライバシーに関して細かい点は聞けないまでも、例えば転職や進学など大雑把にでも把握はしているか。
- 事務局 : 端的に理由を説明するのは難しい。「別紙 分析結果及び整理」の2ページに「年齢階級別の人口移動分析結果及び整理」をお示ししているが、女性15～24歳の転出超過は大学進学など、男性20～29歳の転出超過は就職など、女性20代後半～30代の転出超過は結婚などの影響が強いと分析はしている。ただし、これはあくまでも数字上の判断によるもの。
- 会長 : その辺りの要因を探るためアンケートの実施をこの先予定している。自然増のためには若い夫婦の存在が必要だし、雇用の場があるということは社会減を食い止めることにもなる。

- 委員 : 人口減少について、あまり悲観的・否定的に捉えなくてもよいのではないか。どの辺りの人口規模がよいのかは、行政のこれまでの経験を踏まえればある程度のラインが示せるのでは。
- 会長  
委員 : ある程度淡々と受け止め、前向き思考で行こうという考えもある。  
: 私自身は転出組である。南那須で生まれ育ち、現在は宇都宮市民である。データの見方として、兄弟構成の視点も考慮する必要があると思う。第2子・第3子以降は地元に戻る理由が特にならない。周囲を見ても地元に残るのは長男・長女。第2子以降の転出動向を把握すべき。
- 会長  
委員 : 2番目・3番目の子でも、雇用の場が地元であれば状況は変わるかもしれない。  
: 学校は東京に行ったが、こちらに戻ってきて住んだのは氏家町。選んだ理由は、宇都宮と近く、電車があり、国道4号沿いにどんなお店でも揃っている点。当時の私にとってそれが魅力だった。
- 委員 : 私は宇都宮の清原から転入してきた。清原も以前は雑木林が広がっていたが、まちがどんどん切り開かれていったのは上下水道のインフラ整備の影響が大きかったと聞いている。那須烏山市にきた当初は、PRや宣伝が見受けられず、どこに公園があるのか、子育てしているお母さん達はどこに集まっているのか、全く見えてこない状況だった。ただ、住み始めて15年以上になるが、今は非常に素晴らしい土地だと感じている。歴史があるし、景観も素晴らしい。蓄電池電車のアキュムが走るし観光資源も十分にある。それらがコンパクトに揃っていることは魅力であり誇り。ただ、それらが磨かれていないだけである。
- 委員 : 資料8ページの「図表9 年齢階級別の転出状況」を見ると、20代・30代あたりが県内に転出している。これはどういうことか。働く場所はあるとの話だったが、若者の働く場所、若者が魅力を感じる働き先があれば、もう少し那須烏山市に留まるのではないかと思う。
- 会長  
委員 : 働く場所はあるが、そこを求める若者がいないということ。  
: 第2子・第3子の居場所がないという話だが、いくらでも働く場所はあるのに、第2子・第3子はそれをきちんと見定めていない結果だと思う。親と離れて暮らしてもよいという意識・認識が叩き込まれている弊害である。
- 委員 : 小山市・さくら市・那須塩原市はアクセス環境が良い。若い方も定着するケースがあるが、この場合に働き場所は関係ない。那須烏山市のアクセス環境は悪いが、地域の資源は活用したほうが良い。産業が生まれれば、他に住んでいたとしてもこちらで就職して働いてくれる。産業にも、農業・建設業・製造業・サービス業など様々あるが、何を中心に展開していくかという問題がある。那珂川町では、温泉トラフグの水産関係も就職先として確保しているし、マンゴーハウス、ウナギの養殖場、バイオマス関連施設などの取り組みも本格化している。このように産業を一度に引き込むことは出来ないが、一つ一つ物事を進めなければ目標に到達しない。まちづくりは人の心理と大きく関わる。幅広い視点でながれを読む必要がある。
- 委員 : 放課後児童クラブを支えている立場として。働いている保護者の働き先について、統計をとっている訳ではないが需要が増えているのは確実。気になるのは、母親のお迎え時間の遅さ。土曜日・日曜日も子どもを預けるケースがある。恐らく、働き先は市外である可能性が高い。そうした現状を、これから子どもを産もうとする若いお母さん達も見ている。そうなれば、自ずと自分の子どもには働き先がある場所に住んでほしい、という考えに傾くのも理解できる。

- 会長 : 市内に働き先があれば十分にやっつけていけることだろうか。
- 委員 : もちろん市内で働いている人もいるが、正社員になってもっと収入を得たい、或いはひとり親なので沢山の収入が必要といったケースでは、市内で正規雇用を得ることは難しく、市外に働き先を求めるといった悪循環が見られる。今の若者にはどんな職種が人気なのかの把握も必要である。
- 会長 : 大きな視点でいくと、働き先は市内にあったほうが良いのだろうか。それとも宇都宮で働いたとしても住むのはこちらでと言うか、またはその逆のパターンも考えられる。これまでの皆さんのご意見から、「論点7 人口の目指すべき将来の方向・目標」あたりまでカバーできているだろうか。人口が減るのは仕方ない、それを抑えるために手を尽くすべきという方向性まではOK。では、具体的に何をすべきか。全ての産業をバランス良くという話はやはり難しいだろうか。
- 委員 : 地域性もあり難しいと思う。物をつくったとしても売れば良いが。
- 委員 : 私も外から来た人間で、多くの農家を訪れたが、皆さんとても豊かな暮らしをされているという印象がある。梨・いちご・お米となんでも揃い、ギリギリに追い詰められていないので、改めてなにかに特化して取り組む必要はないという感じ。人口を減らさないためにどうにかして、という意識にまでは至っていない。
- 会長 : 「なすからミーティング」の検討結果を見ると、なにか突出したものはなくとも、那須烏山市ではなんでも揃う、全ての面のバランスが最高であるとPRするのも一つの手である。自然に触れられる環境は子ども達にとっても良いもの。ただ、子ども達が大きくなって一度家を出るにしても、戻ってきて働くことのできる環境の受け皿はあるだろうか。
- 委員 : 確かに働き先のミスマッチはあると思うが、これからしっかりと物事を進めていけば雇用に結び付けることもできるのではないかな。
- 委員 : 金銭的な要求を充たすのか、心の要求を充たすのか、そのどちらかだと思う。前者であれば、子どもに沢山のお金をかけ塾にも習い事にも通わせることができる。後者であれば、子ども達は広い自然の中に溶け込んで遊び回ることができる。市がどちらかを見定めるとすれば、リスクが少なく、今ある豊かな自然を使い、郷土愛を育てるような方向性で進めていくのがよいのではないかな。那須烏山市に住んでいる良さを大人の観点からでも引き出せれば。
- 会長 : ただ、総合戦略では、若い人達の定住増につながる産業・雇用が一つの条件として求められている。住みやすい環境と政策を上手くつなげる必要がある。住みやすい・教育的に良いという点も非常に大事だが、それをなんとか産業・雇用とつなげていくためにどうするかということが問われている。学生と日々接しているが、ある程度の安定した収入さえあればまちづくりに取り組みたいという意識を持つ若者達も増えている。問題は食べていく手段である。那須烏山市にきたがどうやって食べていくか、それさえあればということもある。必ずしも一つに特化するのではなく、それぞれの産業を底上げしていくという方法も考えられるだろう。
- 委員 : 「なすからミーティング」の検討結果を見ても、若者達は相当考えているように見受けられる。その辺りを上手く底上げして進めれば発展性があるように思う。
- 委員 : 那須烏山市に住みたい、農業をやりたいという人は多いと思う。移り住んでもらいたいと働きかけもしていると思うが、那須烏山市は他市町に比べて地価が高いように感じる。もう少し安くすれば移住者も増えるのではないかな。

- 委員 : 地価については、確かに以前は高かったが今は安くなっている。どうすれば人口減少を抑えられるかについては、これまで何回も議論した。結局は、教育・雇用・医療・価値観にたどり着く。今多いのは子どもの教育のために転居する人。子どもの将来の教育のため、那須烏山市に勤めているながら他市町に家を建てて住んでいる人は沢山いるし、雇用の場だけが人口減少の要因ではないということ。医療についても、那須南病院を頑張って建てたが、将来の安心のために医療が充実した場所に移り住んでいく。価値観についても、今の若者達は自然が多くて良いということを理解しない。那須烏山市はなにも無くてつまらない場所となる。転居する主な理由はそのあたり。全体像を描く時には、その4つの柱が一番頭の痛いところである。
- 委員 : 現に、宝積寺の光陽台・宝石台などは、別名烏山村と呼ばれるほど烏山から家を建てて移り住む人が多い。転居の要因の4つの柱はその通り。若者達はあまり那須烏山市のことを考えていない。
- 委員 : 地価が大きな要因である。当時は烏山で家を建てるより宝積寺で家を建てたほうが安かった。
- 委員 : 地価の安さをPRして来てもらうことも考えられる。
- 会長 : 地価を安くすることも魅力だろうが、もっと攻めの魅力を打ち出すことも必要。やはりポイントは教育だろうか。
- 委員 : 那須烏山市の地域資源を使い、マンパワーで可能な範囲で思い切った手を打てないだろうか。例えば、医療・塾など生活に関わるものがコンパクトに全て収まるような仕組み。市民の中には優秀な人が沢山いる。そうした方達が、例えば、安く塾を開くといったようなイメージ。自主サービス・自助の考え方で、お金ではなく、人間のコミュニケーションでコンパクトに物事を進めていければ良い。
- 会長 : 実際にはお金が回ることも求められているが、重要な方向性であると思う。何もかもがコンパクトだけれど全てそこで完結するということを目指すとなれば、那須烏山市のまとまりある地形も利用できるし強みとなる。
- 委員 : 今は買い物にしても医療にしても全て外に流出してしまっている。国際医療福祉大学の先生が以前に調査された時も、那須烏山市の医療費の半分以上は大田原市に流れてしまっているとのことだった。
- 会長 : それらが全てここで完結するとなれば一つの解決策になるだろうか。
- 委員 : 少し違うように感じる。10代後半から20代の転出が高まっているが、例えば、ここで議論している内容を烏山高校や宇都宮大学の若い子達に話して、果たしてどれ位の人達が残ってくれるだろうか。いずれにしてもお金と楽しみという要素は間違いない。工業誘致の視点から考えると、工場を建てればこの先5年・10年は法人税を免除するというような取り組みも一つの方法。ここに家を建てれば10年間市民税は無料というような情報は耳に残るはず。那須烏山市としては、若者世代にアプローチしていかないといけないし、彼らの耳に残るような方法を探っていかなければならない。
- 会長 : 今回は高校生など若い世代をターゲットにしたアンケート調査などを行っていく予定である。
- 委員 : 若い人達は価値観が違う。農村・自然に興味を持つ人もいれば、インターネットなどの新しいものに価値を見出す人もいる。価値観が違うと難しい。地元に戻ってきたとしても、仕事が合わないと再び転出してしまうケースがある。

- 会長 : 子ども達が大学に出ていった後に戻ってくるかどうかが大事。外に出ることによって、この良さを改めて理解するという場合もある。
- 委員 : 若い子達も地元で用が済むならわざわざ遠くまで出かけたくないはず。まちの中で買い物が楽しめ、医療などもすむというのが一番良い。周囲に大企業があったとしても、ここに住んでもらえるのではないか。
- 委員 : コンパクトが良いと思う理由の一つとして、小さい子どもを持つお母さん達のニーズがある。まちの中に色々なものがあれば、買い物など外に出る時間が少なくてすむし助かる。宇都宮にある大規模な商業施設までは求めない。必要最小限の機能でよい。
- 委員 : 実際に肌で感じていることを基に議論することも大事だし、住みやすさに賛同される方達も多いと思うが、同時に、客観的なデータ・資料に基づいて判断していくという視点も重要である。
- 委員 : 新庁舎の話がでた場合にも、栃木市のように行政と商業の複合施設とするようなことを視野に入れるべき。若い人達が求めているような施設が庁舎に入れば有り難い。
- 会長 : そうなれば若い家族がこちらに来る可能性も高まるし、人口増にもつながる。
- 委員 : 核家族で初めて子どもを産む母親は不安がいっぱいである。そういう方達は、一つの場所に全部が揃っていることを希望する。
- 委員 : 外から見た那須烏山市と内から見た那須烏山市では印象が異なる。例えば、前任地である日光市の人に那須烏山市の印象を尋ねると、山あげ祭・鮎・和紙・東力士といった名前があがり、観光資源を中心に発展しているまちがイメージできるが、実際には、和紙を生産している方は少ないし、お酒に関しても数社がある程度。山あげ祭は全国的にも有名だが、それに関連して生計を立てている人もいない。住んでいる人達からすれば、非常に住みやすいまちということだが、それがあまり外向きに発信されていない。人口の減少が本当に課題なのかといった投げかけがあったが、私もそう思う。もしも観光というキーワードで那須烏山市を再生するのであれば、人口はあまり関係ない。フランスやロンドンなども人口より観光客が多いが、それでも十分生計は成り立っている。外から見た観光を軸としていくのか、内から見た生活基盤を軸としていくのか、どちらを選択するかで、人口減少問題に対する取り組みは違ったものになる。個人的には、那須烏山市の伝統・芸能などは全国的に見ても知名度アップにつながると思う。和紙の生産で世界に羽ばたき、その商品がフランスやイギリスなどに輸出できるような状況になれば、このまちもそれなりに有名になり、マスコミにも発信ができ、結果的により良いまちづくりに発展するのではないかと思う。
- 会長 : 観光の部分で良いものを持っているのだから、発信をしながら上手く組み入れていけないかということ。
- 委員 : 日光市も人口減少が進む中で観光誘致に積極的に取り組んでいるように見える。実際に地元へ落ちる金額は増えているのだろうか。
- 委員 : 日光市の場合には世界遺産である二社一寺が観光の代名詞。陽明門が修復中で難しい面はあるものの、市長自らが海外に出向き、インバウンドのかたちで外国人誘致を積極的に進めていることから、観光客自体は増えている状況。日光から烏山に回る観光ルートがあり、経済の流れがつくられれば面白いと思う。

- 委員 : 雇用を安定させれば収入も安定する。那須烏山市は中小企業が主体になるが、それらの底上げが必要になる。大企業と異なり、中小企業は国・県のものづくり補助金などを頼りに開発を進めるしかない状況だが、那須烏山市ではどのような形で支援しているか。市による中小企業の開発につながる手当などがあれば教えてほしい。実際にはなかなか資金が回らない企業が多いと思う。
- 委員 : 市の融資制度があったと思う。
- 事務局 : 融資制度のほか、開発について一部補助がある。ただ、金額が小さいうえに、県の補助との併用は認められないことから、金額の大きい県の補助を利用するケースがほとんど。
- 委員 : 商工会ではベンチャー企業などの事業者に対し支援を行っている。ベンチャープラザは空きがある状態で困っているが。
- 会長 : その辺りをもっと拡充して雇用を安定させるということ。誰もがなんとかしたいという思いがある。実際にやるとなればどうかという話もある。論点の順番どおりに話は進められなかったが、様々な意見をいただき大変有り難い。

以上